

# 日本唯識思想の研究

## —安養唯報・通化説の展開—

「同学鈔において唯識宗の正義は確立された」とみる学者もあるように、一般に日本唯識教学は鎌倉初期に編纂された『唯識論同学鈔』の成立をもって「帰着点」とみなされる傾向にある。しかし、『同学鈔』は主に古抄物や藏俊の『菩提院問答抄』を規範として、当時の一般的教説に基準をおいて作成されたものにはすぎず、決して宗義を最終的に決着した書ではない。鎌倉から室町にかけての時代に『同学鈔』収録の教説をひるがえすような事態がしばしば生じてきているのもこのためである。すなわち、日本唯識教学はその中に相対立する面を幾つか有しながら、平安・鎌倉・室町と順次展開されていったとみるべきなのである。今回述べる「安養報化」などはそうした異義を有する典型的な例の一つであり、後世、『同学鈔』所説の教説とまるで別の展開が多々みられた好例といえよう。

さて、「安養報化」であるが、この論題は一言でいうと、

日本唯識思想の研究(楠)

## 楠 淳 證

弥陀の浄土がただ報土——十地菩薩所見の土(他受用土)——のみに限られるのか、それとも報土ばかりでなく化土——三乘同見の土(変化共浄土)——もまたあるのかという点を問題とするものである。この問題のそもそのものおこりはといえ、宗祖慈恩大師基(六三一—六八二)の『義林章』『仏土章』に唯報・通化の二積が示されていたことに由来している。いわゆる唯報積とは、(一)『観経』に阿鞞拔致不退菩薩が往生し、少善根の者は往生しないとある点、(二)『浄土論』に女人・根欠・二乘種等が生じないとある点、(三)『撰大乘論』に凡夫の十念往生は別時に生ずるの意であるとある点、(四)『観経』に弥陀の毫相が五須弥の如しとある点、(五)『観世音菩薩授記経』に等覺の菩薩である観音が弥陀の補処として示されているという点——以上の五点を根拠とするものである。一方、通化積とは、(一)『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』に弥陀にも父・母・子・魔・調達・王城等のあることが示されている点

(二)『観経』の九品生の中に二乗衆の名がみられるという点——以上の二点に基づくものである。<sup>3)</sup>この二釈をたてたのち、慈恩大師がその取捨を後学の意にまかせてしまったところに、後世、種々に諍われる大きな原因があつたわけである。

日本において当初、この問題がどのように取り扱われたかは今一つ定かではないものの、現存する資料の中で最も古い時代に属するものとして、まず第一に蔵俊の『菩提院問答抄』を挙げねばならない。この書は現在は散逸して無く、貞慶の『唯識論尋思鈔』や良算の『唯識論同学鈔』等にその断片を留める程度であるが、こと、この「安養報化」に関して、『同学鈔』に「菩提院僧都の筆を略して」その大意が示されているのである。今その内容を窮うに、蔵俊は明らかに「唯報説」にあつたことが知られる。蔵俊説くところの唯報説とは主として慈恩の「唯報釈」をよりどころとするものであるが、ただ彼の場合は明らかに「唯報」の側に立って「通化」の面を破している点に、その立場が鮮明に示されている。すなわち、慈恩の通化釈を根拠に展開する「通化説」に対して、蔵俊は、(一)『鼓音王経』の化身は報身仏に他ならない、(二)『観経』等に示される二乗・異生衆は仏・菩薩の化現であるか、あるいは別時意趣・対時秘密である——と反論しているのである。まさしく蔵俊は、唯報説を主張した人物で

あつたといふことができる。

ところが、こうした蔵俊の唯報説に対して、あえて通化説を論じた人物がいる。蔵俊からみれば孫弟子にあたる解脱房貞慶（一一五五—一二一三）である。彼は、『論第十卷尋思鈔別要』の「西方有異義」において、

中品三輩二乗衆也。若唯菩薩不共淨土者二乘豈住哉。加之設業因  
 举世三福業。所謂孝養父母奉仕師長等也。其因既不超汎爾業所感  
 果報豈異弥勒下生時哉。

と述べるように、『観経』に説かれる二乗衆の存在を化土のある証として重視し、また往生の業とされる三福業が汎爾の業をなら超えるものでなく、その所感の果報が弥勒下生時と同じであるという観点から通化説を主張したのであつた。『同学鈔』に収録されるほどであるから、蔵俊の説は当時かなり有力な説であつたと考えられる。にもかかわらず孫弟子の貞慶があえて通化説を主張したのであるから、そこには「固定化された数学の師資相承」といった形態はおよそ窺われないといわねばなるまい。

ついで鎌倉中期に入るや、良遍・顕範らがあいついで通化説を主張する。まず、良遍（一一九四—一二五二）であるが、彼は貞慶の孫弟子にあたる人物で、宝治二年（一二四八）に著した『観心覚夢鈔補闕法門』「西方報化」の中で、七つの理由を挙げて通化説を主張している。その中で特筆すべきは、

一切の仏身には必ず三身が備わっており、その三身それぞれに所居の土があるという、いわゆる「唯識の道理論」による展開をおもだして示している点であろうか。また、極楽界というときは報土であるが弥陀浄土そのものには化土もあるという解釈にも、良遍独特のものが感ぜられる。

次に顯範（二二四五—？）であるが、彼の場合も

弥陀可有三身土。……情案道理。……論実義者地上菩薩住他受用土、二乘異生等可生变化土。……凡九品之機皆是地前等也。……

撰揚大師自欣西方。……秋篠大徳増明記初偈頌云、共生西方安楽国唯願種覚加神力臨命終時放慈光引導清淨安樂界彼者釈唯識義燈不専安養者非可發此願。昌海和尚属彼門人。抄西方念仏集勸彼土往生。可知通化土之義真理之説ナリト云事。

と、まず「唯識の道理」より通化を主張し、ついで第三祖智周や日本の善珠・昌海らが西方を欣求してみせて衆生を化導しているのは化土のある証であるとの判断を示している。

このように、鎌倉時代には道理にのっとって「通化説」が論じられ、これがかなり有力になるように思われる。しかし、「唯報説」がまったく説かれなくなったわけではない。

鎌倉から室町にかけての作と考えられる『南都論草』所収の「変化長時浄土」という論草<sup>8)</sup>には、唯報説が自明のこととして説かれているのである。この結果をかんがみれば、『同学鈔』成立以降も、二説相競いあっていた事実がよりはっきり

と確かめられるであろう。

およそ、「宗家二義あり」とか「異義まちまち」とされる論義の多くはすべてこのような状況にあり、従来いわれるような『同学鈔』の成立をもって日本唯識教学の帰着点とみなすことは早計ではないかと思われるのである。もちろんこの論題だけをもってその証明とするわけにはいかないが、以後機会があるごとにこの点について考察してみたいと思う。

1 富貴原章信『日本中世唯識仏教史』九九頁。

2 『同学鈔』の成立に関しては、城福雅伸君が『印仏研究』34—1に新しい見解を示している。

3 大正四五・三七一頁。

4 大正六六・五八六頁。

5 大谷大学所蔵本。

6 日大蔵六四・一三六頁。

7・8 大谷大学所蔵『南都論草』所収。

（龍谷大学講師）